

84. 切除可能な肺癌における膵シンチグラフィ

イー

千葉大学 放射線科

国安 芳夫 内山 暁 寛 弘毅

第一内科

土屋 幸浩 大藤 正雄 奥田 邦雄

〔研究目的〕 現在膵疾患特に膵癌の診断には、低緊張性十二指腸造影法、静脈性胆道胆のう造影法、十二指腸鏡による内視鏡的膵管及び胆管造影法、経皮経肝性胆道造影法、血管造影法、シンチグラフィ等を駆使して総合的に診断されている。膵疾患の診断におけるシンチグラフィの価値に関しては多くの報告があり、それらの報告によると、膵癌は膵スキャン上に何らかの異常所見として非常に高率に指摘できるがその確率率に関しては尚多くの問題点がある。現状では膵癌の診断がついても殆んどが手術不能例である。今回は種々の方法により診断された膵癌の中で根治手術の可能であった症例7例について膵シンチグラフィの臨床的意義に関して検討したい。即ちこれら症例で手術所見による膵癌の占居部位及び範囲をスキャン上に指摘できるかどうか、又不可能な場合には膵スキャン上どのような所見を異常像としてとらえなければならないか更に膵スキャンが膵癌の確診のための手段となりうるか、あるいはスクリーニングテストと考えるべきか等についての検討である。

〔結果〕 検討の対象となった例はいずれも腫瘍の大きさが5cm以上のものであり、組織学的には殆んどが腺癌であった。腫瘍の占居部位は膵頭部特に総胆管に影響を及ぼし易い部位のものであり黄疽を主訴とするものが多い。診断のきめ手となった方法は殆んどが胆管像によるものであった。スキャン像では膵の描出不能例、膵頭部の限局的な陰影欠損例、異常を殆んど指摘できない症例の他輪郭不鮮明、膵の像の狭小化、全体的摂取低下像等の異常所見を指摘する事が不能であった。膵全体の描出不能及び限局的欠損像では膵癌を疑い得ても、他のスキャン上の異常所見からは膵癌を積極的には疑える所見では、あくまでも膵に病変の存在を示唆する所見であるに過ぎない。従って現時点での膵スキャンはスクリーニングテストとしての意義がより大きいようである。

85. 膵局所動態解析の研究

—⁷⁵Se-Selenomethionine を用いて—

神戸大学 放射線科

松尾 導昌 前田 知穂 中西 義明

桂 武生

〔目的〕 ⁷⁵Se-Selenomethionine による膵形態診断に加え、正常例並びに各種膵疾患における⁷⁵Se-Selenomethionine の膵局所への集積状態の解析を行い比較検討すると共に、P-S test 施行時の pharmacodynamic study の検討をも加え、膵の病態生理学把握を試みた。

〔方法〕 ¹⁹⁸Au-colloid 50 μ Ci 静注後、1000 holes Collimator を装着したシンチカメラを15°仰角位で膵を確認し、30分以上後に⁷⁵Se-Selenomethionine 250 μ Ci を静注した。シンチフォトは⁷⁵Se-methionine 静注後15分毎に撮影すると共に、シンチカメラのCRT上の像を128×128のmatrixの位置信号としてVTRに収録した。再生に際し、膵頭、体、尾部領域の各々にsplit areaを設定し、同時に同じ大きさのバックグラウンド領域における放射活性と共にdigital printer上に記録し、用手法によるhistogram描記を行い、集積係数を求め比較検討した。更に60分経過後にpancreozymin及びsecretinを投与し、各領域における放射活性の変化を観察した。同時に十二指腸液を採取し、Amylase活性値、重炭酸濃度、膵液量測定を行うと共に採取された液中の放射活性の変動をみた。

〔結果〕 正常10例、膵癌9例、膵炎36例、胆管系疾患6例、肝疾患10例の計71例について各領域での集積係数を求め、平均値の差の検定を行った。膵炎、膵癌局在部位、総胆管結石症例における集積係数は、正常例のそれに比し有意の差をもって低値を示した。P-S testによるpharmacodynamic studyを11例に施行した結果、膵正常部ではpancreozymin注入により、放射活性の低下がみられたが障害部位に於いては、その変動値が減少或いは全く見られず、膵障害部位の検索に有用な方法である事がわかった。